

心光寺からの便り

【*法座の日程は最終頁をご覧ください】



春のお彼岸も間近となりましたが、由布の山里ではこのところ、小雪や霰あられの舞う厳しい寒さに逆戻りしています。皆様つつがなくお過ごしでしょうか。

◇さて先月十日のことです。朝から風邪気味で体が重かったのですが、何とか仕事には出ました。ところが翌日十一日の朝、ついにどうにも起きられぬ状態となりました。体温を計ったら四十度近い高熱です。驚いて家内に病院に連れて行ってもらいました。インフルエンザとの診断でした。点滴を受けた後、その日は家でずっと寝ていました。

は音ねを上げました。痰がしきりに出るのですが、のどに激痛がはしるので、のみこむことも吐くこともできず、ほんとうに困りました。老人がのどに痰をつ

まらせて亡くなったという話をよく聞きますが、その苦しみがよくわかります。そんな状態でしたが、一日寝ていたら、その日の夜ごろから少し体が楽になりました。翌十二日も仕事は休みましたが、だいぶ体調は戻ってきました。寝たり起きたりしながら、「心光寺からの便り」(二月号)の発送作業や三月十六日の住職継職法要の準備等を少しずつやり始めました。

インフルエンザにかかってつくづく思いました。四十度近い高熱の最中には、全てのものに対する気力が全く失せてしまいます。「心光寺からの便り」を書いたり、役所の仕事をしたり、寺の法務をしたり、その他日常やらなければならぬ諸々のこと。それらは今まで自分がやってきたことでありながら、その全てが病に伏せている最中は、よくまあそんなことができていたものだとも信じられません。それほどそれらが、山のように重たくしんどいものにも思われます。もう二度と再び私はそんなことはできないのではないのではなからうか。本気でそんなふうにはさえない思いました。

ところが少し熱も下がって体力が回復してくると、それに伴って気力も次第に回復してきます。そうするとやりかけていた「心光寺からの便り」の発送作業や住職継職法要の案内状の作成等を、寝たり起きたりしながら少しずつやり始めています。これは全く不思議なことだと思いましたが、思いました。当たり前のことではないなと思えました。全てのものに対する気力が萎えた昨日の自分からすれば、そのように何かができるということ自体、本当に不思議な恵みに思われました。

このことから、私が今まで元気でそれらの仕事をしてこられたのは、決して自分の力ではなかったということがよくわかりました。まさに大石先生がおっしゃるように、「如来様が、如来様の仕事を、私を使ってなさ」っておられたことなのでした。

病が癒えていく中でこんなことを思いました。

「私は今再び体力を元のように回復しつつある。しかし何時の日かこの体力も二度と回復せず、力なくして終わる時が必ずくる。してみると、今私に与えら

れつつある体力と気力は、限られた時間の中で何かに使うために、これから私に与えられるものである。決して自分のために浪費するものとして与えられるのではない。如来様に使ってもらうために与えられるというのが真実である。」
そんなことをしみじみ考えさせられました。そういう大事なことを教えてくださったインフルエンザにつくづく感謝しました。

◇先月初旬、久々に大石先生からの書信が届きました。書信第八十七信。題は「今日も願いに生かされて」です。

私はインフルエンザが次第に癒えていき、体がまた元の気力をとり戻しつつある最中に、この書信を読ませていただきました。読みながら、大石先生が現在生きておられる根本の力、大石先生の活動の源泉を見せていただく思いがしました。繰り返かえし読ませていただきました。読んでもまた読まずにおれません。これからもこのようにして繰り返かえし読ませていただくことになると思います。

なぜそんなに繰り返かえし読まずにおれないかという点、そこに書かれていることは知識ではないからです。知識だけなら一度読んで理解すれば足りません。しかしこの書信に書かれていることは、大石先生が今日もそこを生きつつある日々の活動の源泉が書かれています。つまりそれは精神の食べ物です。食べ物はいくら腹いっぱい食べたからといって、後はもう食べなくていいというわけにはいきません。毎日三度いただくことによって、はじめて日々の活動の源泉を与えられます。また血となり肉となつて、私を支えてくださいます。だから毎日食べても飽きることはありません。

大石先生の今回の書信、また今までの書信も全て、まさにそのような精神の食べ物であると思わずにはいられません。

◇今回の書信に書かれている内容は、その題「今日も願いに生かされて」の一語に全て収まっていると思います。その願いとはどのような願いでしょうか。書信のお言葉にお聞きしてみたいと思います。

「入苑にゅうえんして間もないころのことです。師が私に申されました。『あなたによつてへ人間に生まれてよかった』と喜ぶ人が一人でもできたら、僧侶になったかいがあつたと思つてよい。そういう人が一人も出なかつたら、僧侶になつたかいはありませんよ』と。

師が私に託された願いを、今も新しく押しいただく思いです。師の予言と申しましょうか、私に對されての期待と申しましょうか、それを今なお新たに感じるのです。期待などという言葉はこの世の言葉ですが、私の実感から言えば、師を通しての仏様のご本願かいりきの加威力かいりきなのです。それに守られ、使つていただいているのです。そのことを、謝したてまつります。」

(大石法夫先生書信第八十七信「今日も願いに生かされて」三頁)

藤解とうげ先生が大石先生に託された願いを、大石先生は「今も新しく押しいただいて」おられるのです。その願いは単なる人間的な期待ではありません。大石先生はそれを、「私の実感からいえば、師を通しての仏様のご本願かいりきの加威力かいりきなのです」と書いておられます。「加威力かいりき」とは、私どもに常に働きつづけてくださる如来の本願力の偉大なる力のことです。その如来の加威力かいりきが師を通して働いてくださるのです。

つまり師はそのまま如来ではありませんが、如来は師となつて具体的に私どもに働きかけてくださるのです。私どもが如来に触れ得るのは、このかたちしかありません。

私が師を通さずに直接如来に触れようとするとき、そこに種々の間違いが生じてきます。その辺のところを、大石先生はご著書の中で次のように書いてくださっています。

「人は自分の無知、無能を知らされるほど明るくなれるのです。自己の無知を知らず、自分の理解力りかいりきで仏様の教えを受け止めていたら、だんだんと分わからなくなり、暗くらくなります。破滅はめつに至ることもあります。同じ教団で教えを受けた法友の中にも、そういう例はいくつもあります。」

『許されて生きる』百九十頁、*傍点は筆者が打ったもの)

この傍点の箇所を私は他人事で読み過ぎすことはできません。これは私の今までたどってきたあり方を言い当ててくださっているお言葉です。高一の時に

『歎異抄』を通して親鸞しんらんに触れて以来、私はずっとこの道にさ迷い始め、行きつ戻りつしてきました。結局私は如来に触れることを切望しつつ、一方ではその存在に対する疑いの気持ちをどうしても捨てることができなかつたのです。それを克服しようとして私がたどってきた道は、今思えば、全て自分の理解力で仏様の教えを受け止めようとすることに他なりませんでした。それはどこまで行っても観念化をのがれることができない道です。したがってどこまで行っても血の通った生命に到達せず、だんだんとわからなくなつて、結局破滅に至るしか道がなかつたのです。

もし私が大石先生に出会うことがなかつたら、私の魂たまごはついにその道の途上とほうで、途方にく

れたまま終わるしかなかったと思います。それを思うと、幸いにも大石先生にお会いするこのできた因縁は、いくら謝しても謝し切れるものではありません。

「曠劫多生のあいだにも

出離しゅつりの強縁しやうえんしらざりき



本師源空いまさずは　このたび空しくすぎなまし」

これは親鸞聖人がよき人法然上人に出遇うことのできた喜びを歌った和讃ですが、今この和讃がしきりに思い起こされます。

◇私が長い間行き詰っていた箇所の一つは、弥陀の本願の働きは事実として本当にあるのだろうか。実はそれは架空のことではないだろうか。なぜならこの宇宙には自然界の道理や法則はあっても、それは沈黙した冷たい真理であって、私の苦悩には一切関わりを持たないもの。私がそれに向かってどんなに叫んでも、ビター文動くことのないものだということ。弥陀の本願のように、苦悩の衆生に対する救済意志を持ち、久遠の昔から絶えず働きかけてくる。そんな具体的な力の存在などというものは、所詮人間の要請によって立てられたものに過ぎないのではなからうか。そのような考えをどうしても払拭することができなかったのです。そしてこれは私の勝手な考えではなく、自然界の事実に基づくものあって、否定しようにも否定できないものであると、そう私には感じられたのです。

私はそこにおつかると、もうそれから先前に進めなくなるのでした。様々な法語が砂上の楼閣のように感じられるのでした。一方では信じたいにもかかわらず、他方でこのように思わざるを得ないことはほんとうに苦しいことでした。滔々と教えを説く人は、一体その所をどのように解決しておられるのであるうか。もしかしたら解決したのではなく、その問題に気が付かないまま通り過ぎているのではなからうか。そんな不遜な邪見さえ持ちました。

そういう私でしたが、大石先生にお会いした時、それを突破する一条の光、曙光を感じました。そのことを今回大石先生の書信を読んで、改めて再確認させていただいたのです。

どこでそれを感じるかという点、今回の書信の中で大石先生は、藤解先生が大石先生に託された願いを、今も新しく押しいただく思いであると書いておられます。さらに藤解先生が大石先生に託された願いを通して、仏様の本願の加威力を実感すると書いておられます。そして本願のその加威力に守られ、使

っていただけでは、そのことを謝したてまつると書いておられます。まさにその点においてです。

つまり大石先生において本願とは、知の対象、理解の対象ではなく、師の願いとお育てというかたちを通して、最も具体的に働きかけてくださるものです。大石先生は、そういう師の願い、仏の願いを深く押しいただき、その願いに生涯を投げ出し、使っていたでは、そのことを深く謝す毎日を今日も新しく続けておられるのです。それが先生の日々の活動を生み出す根本力だということが伝わってきます。その根本力は先生が自ら起こす意欲ではなく、先生がおっしゃっておられるように、本願の加威力かいらきです。先生はその加威力かいらきを押しいただき、それに使われては、そのことを謝しておられます。そのために生涯を投げ出しておられます。

この大石先生の生き様の上に、如来の本願が今現に、疑いようもなく確かに生きているではありませんか。

◇私はこのような大石先生の生き様を見せていただく時、なぜか「器うつわになる」という言葉を思い起こすのです。聖書に「土の器」という言葉が出てくると聞いたことがありますので、或いはその影響かも知れません。

器とは何かを盛るためのものです。従って器にとつては、何かを盛られることが自己の使命であり、本当の喜びです。ところが私は器でありながら、自らの使命を見失って、久遠劫来くおんこうらいその中に《私》を入れて、この《私》を見よと、事あるごとに言い立ててきたのです。これに対して「仏様のご本願の加威力かいらき」に「使っていたでいて」「そのことを謝したてまつります」という書信のお言葉は、「本願の器」に喜んでならせたいだくということなのです。

「本願の器」にならせていただいたら、これに過ぎる喜びはないはずですから本願を押しいただき、使っていたでいて、そのことを深く謝したてまつるのです。

◇「阿修羅の琴あしゅら きん」の譬たとえも思い出されず。これは本願力を表すものとして、

中国の曇鸞大師が『浄土論註』の中で取り上げられた譬えです。

「本願力というは、大菩薩、法身の中にして常に三昧にましまして、種々の身・種々の神通・種々の説法を現じたまうことを示す。みな本願力より起るをもつてなり。たとえば阿修羅の琴の鼓する者なしといえども、音曲自然なるがごとし。」

これがその箇所です。阿修羅が自分で奏でようとする手を離れたから、そこで法蔵菩薩が自在に音曲自然の音色を奏で始めたのです。

我々も阿修羅の琴にならせていただいて、法蔵菩薩の本願力に自在に奏でられる身になることができるとしたら、これに過ぎる喜びはないでしょう。

◇「今日も願いに生かされて」——第八十七信の題にこの語をかけた大石先生の喜びは、「本願の器」とならせていただいた身の喜び、また「阿修羅の琴」とならせていただいた身の喜びに他ならないことを感じます。そしてここに、大石先生が師のご恩を深く拝される一番元があると思っています。そのような身にならせていただいたからこそ、厳しかった師のご化導を振り返るとき、その厳しさがなかったら今日の自分はないと、今は亡き師のご恩の深さが今更のように偲ばれるのです。

◇書信第八十七信には、今年の正月に大石先生が出された四種類の年賀状の内、二つの文面が紹介されています。その内の一つは、平成九年の元旦、大石先生が法林寺の本堂で話されたお言葉の一部です。このお言葉は先生の著書にも取り上げられています。年賀状の方は一部省略されていますので、著書の方から引用してみましよう。

「私は大正十年生まれです。昭和の時代を生かされ、今日平成九年の元旦を迎えました。生まれて七十六回目の元旦です。その間、一番大きな喜びはよき師に遇い得たことです。もし師に遇い得なかつたら、今日の私はありません。」

「よき師に遇い得たということは、ご本願に遇い得たということです。ご本願に遇い得たということは、お浄土はあるのですよと言いだるることです。お浄土に生まれたら、仏様のご本願をわが願いとして、終生、有縁の人の助かることを願い続けるようになります。それも浄土に備わっているお徳であり、ご廻向えこうです。仏様のご本願の方に成就されていたお徳によるのです。その願いに生きることが、人間の最高の喜びであり、幸せなのです。」

それを願ってくださったのが、私にとつての師匠様なのです。

『人みな願いに抱かれて』百三十六頁

この中で大石先生は、七十六年間の生涯の中で一番大きな喜びは、よき師に遇い得たことだと言いつつおられます。よき師に遇うことが単に人に遇うことなら、とてもこんなことは言えないだろうと思います。よき師に遇い得たということは、ご本願に遇い得たという喜びに他ならないのです。よき師に遇うことがなかったら、ご本願に遇うことは決してなかったのです。たとえ本願という言葉は知っていても、単なる理念で終わっていたのです。弥陀の本願が単なる理念ではなく、生きた魂であることを、身をもって証明してくださったのがよき師です。そして何よりも厳しいご化導けどうを通して、大石先生を深く念じ続けてくださったのです。その師のお陰で、ようやく遇い難いご本願に遇わせてもらうことができたのです。

ご本願に遇い得たということは、浄土をもらって、仏様の本願に使っていたたく者として生まれ変わったということです。そして終生しゅうせい喜んで本願の仕事を果たさせてもらおうと歩み始めたことです。それが「今日も願いに生かされて」の内容です。大石先生はそうようになったことを、「人間の最高の喜びであり、幸せなのです」と書いておられます。「もし師に遇い得なかったら、今日の私はありません」こう大石先生は書かれています。「今日」とは、そのような願いに生きる者とさせていだいたことを指しているのです。

師を通して遇い難いご本願に遇わせてもらったというこの喜びは、七十六年（現在では八十二年）の生涯をやがて突き抜けて、はるか昔から今日の私を願われていたという喜びに深まっていけます。

「今にして思えば、私は母の胎内における時から、更に言えば、はるか昔から、仏様に念じられておったのです。お師匠様に遇わせて頂いてそれを教えて頂いたのです。」

『生まれてよかったですか』二〇四頁

本願に遇うということは、このような久遠劫來の時の感覚を呼び覚まされることなのです。それは親鸞聖人の

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」

というお言葉にも明らかです。

◇先日、宗派の機関誌『真宗』を読んでおりましたら、次のような言葉に出会いました。

「結局、ひとです。そういう仏の心というものに巡り合って、その仏の心というものに依って立って生きておられるひとです。不思議なことにそういう方がいらっしやる。だから、出遇えると思いますよ。出遇えるだろうかと心配するひともいらっしやるようですが、あまりそういう思いを抱かずにごへでもどんどん出かけていけばいい。きっと出遇えます。」

『真宗』二〇〇三年二月号五十六頁、宗正元師講述『念仏者として独立せん』

私はこの言葉を読んだ時、すぐに大石先生を思い浮かべました。

「仏の心というものに巡り合って、その仏の心というものに依って立って生きておられるひと」

「不思議なことにそういう方がいらっしやる」

これはまさに大石法夫先生のことではないか。大石先生に対して日ごろから私が抱く感嘆の念を、何と簡潔に、端的に言い表してくださっているのだろうと驚きました。私はこの箇所を読んだ時、思わず熱いものを感じて仕方がありませんでした。

◇さて来る三月十六日は、大石先生をお迎えしての住職継職法要じゆうしよくけいしよくほうようです。この大事な法要を迎えるに当って今私が思うことは、大石先生が今日もそうなさっておられるように、私もまた、師が私に託された願いを押しいただき、師を通して仏様のご本願の加威力かいらきを拝し、それに守られ、使っていたいで、そのことを謝したてまつる。願わくばそのような生き方をもって、私の生涯を最期まで全うしたいということでもあります。

南無阿弥陀仏

官岳文隆拝

平成十五年三月十一日

撰取山心光寺

◇平成十五年三月十六日（日曜日）

「心光寺住職継職法要」

（日程）午前十時～ 勤行・儀式

午前十二時～ 昼食

午後一時三十分～ 記念法話

講師 大石 法夫 先生

◇平成十五年三月十六日（日曜日）

「定例間法会 座談会」

（日程）午後七時～ 座談会

講師 大石 法夫 先生

◇平成十五年三月十七日（月曜日）

「春季彼岸会」

（日程）午後一時三十分～ 勤行

午後二時～ 法話

講師 大石 法夫 先生